

◆実践研究報告◆7

現職保健体育教諭でガイダンスカウンセラーの立場を活かすために NPO法人設立(2016年10月～2019年3月までの実践報告)

—学習支援・社会性支援・ビジョントレーニング・運動支援—

山本 将士 (特定非営利活動法人くわな発達支援塾理事長・尾張学園名古屋大谷高等学校保健体育科教諭)

1 問題と目的

国立特別支援教育総合研究所によれば、昨今幼児期に配慮の必要な子どもが多く気づかれているが、その気づきを支援につなげる相談体制や支援体制が十分に整備されておらず、なおかつ地域格差が大きいことが指摘されています。そのため、十分な支援を受けるためには個人の多大な努力が求められ、発達障害や未診断でつまずきのある子どもたちとその家族には大きな負担がかかっているのが現状です。さらに支援を受ける対象になったものの、特別な教育的ニーズを求める児童生徒数も多く、長期にわたり継続的な支援を受けられないケースも多々見られます。

桑名市でも、上述したような環境であります(桑名市担当部署、三重県スクールカウンセラー)。このような状況のなか、特別な教育的ニーズのある子どもたちが、現在および将来にわたって豊かで活力のある生活を送るためには、診断の有無にかかわらず、発達の遅れに周囲が気づいたときに、いち早く支援ができる場が必要であると考えます。子どもたちへの支援は、時期が早ければ早いほど効果が高まり、支援の効果がより高いと考えられます。

そのため2016年10月、診断の有無にかかわらず、発達障害や未診断でつまずきのある子どもたちを対象に、個々のニーズに合った学習支援や社会性の形成支援、運動支援など教育支援事業を実施することで、特別な教育的ニーズを求める者に、迅速な支援が受けられる環境づくりを進めることを目的とした、「特定非営利活動法人くわな発達支援塾」を設立しました。

2 活動の概要

講師は、現役のスクールカウンセラーや塾講師、高等学校教諭で、全員が心理資格(公認心理師、学校心理士、ガイダンスカウンセラーなど)保有者、さらに教育経験がある専門家が、学習支援、社会性の形成支援(真面目に話が聞けない、友達とのかかわり方が下手など、他者とのかかわるために必要な社会性の発達支援)、ビジョントレーニング(眼球運動のトレーニング)、運動支援(バランス感覚や体幹、跳躍力など学校の授業に必

要な体力や能力の発達支援)を行います。

また、家庭環境の整備は子どもの発達にきわめて重要であるため、毎月1回子どもが授業を受講している間に、ピア・サポート(同じ経験をもっている人たち同士が情報提供したりすることで、問題を乗り越えられること、仲間同士であるからこそ理解し、わかり合えるという尊い支援)やフォーカシング指向心理療法の体験(日ごろのストレスからくる不快な気持ちや感覚を癒し、問題や気がかりを解決へ導けるような心理的支援)などの保護者支援を行います。

3 活動頻度、場所、特徴

本塾は1クラス小学生4名、全部で3クラスに対して、次のような活動をしています。

○毎月第1土曜日と第2土曜日の午後

学習支援、社会性の形成支援、ビジョントレーニングを講師2名、支援員2名、コンサルタント1名の5名で70分を行います。コンサルタントの役割は、客観的な視点から支援内容を観察し、課題発見と課題解決に向けての提案の役割を担うことで、日々の発達支援の質の向上につなげています。

○毎月第3土曜日と第4土曜日

運動支援を講師1名、支援員1名の2名で40分を行います。第3土曜日は親子参加型にすることで、父親の参加や家庭でのトレーニング実践を促します。第4土曜日は子どものみの参加にすることで、1人での参加に慣れることやペアトレーニング(他の子どもと協力してトレーニングする)の経験を積みます。

活動場所は、主に桑名市内の公民館や体育館を使用し、拠点をもたないことで、本来必要とされる固定費や維持管理費の削減が保護者負担の軽減に繋がっています。

4 学習支援、社会性の形成支援、ビジョントレーニングの具体的内容

1回の授業は、本日学習する内容をホワイトボードに掲示してから始まります。

(1) 学習支援の基本は、子どもたちに達成する目標を明確に提示し、自立化を促すことです。そのために、

個々の子どもたちの特徴に合わせて学習プリントの数を調整し、与えられた時間内にどこまでできるかを観察していきます。そして国語の科目では、音読することで記憶力に繋げ、記憶力と読解力をつけさせること、字をていねいに書けるようにサポートすることで、モータースキルを上げることを目標にしています。算数の科目では、プリントを時間内に終わらせるように、集中力の継続時間を講師・支援員が管理し、時間の流れを子どもたちに体感させることで、スケジュール管理の意識づけをさせています。また、学習支援の最後は「できた事」を視覚化し、毎回自尊心を高めさせていくように心がけています。

- (2) 社会性の形成支援は、ソーシャルスキルトレーニング（人が社会で生きていくうえで必要な技術を習得するための訓練）をスモールステップで行い、確実に覚えさせることで、子どもたちの中に、ルールの形成を少しずつ促していくことが目標になります。例えば、絵を見せながら話し言葉と板書の両方から、少しずつ学習していくことに慣れさせていくことや、カードやスゴロクゲームを使用することで、ルールを守れるようになったり、ゲームは負けることもあるということを知ったり、やって楽しいという感覚を身につけたり、自分の感情をコントロールできるようになったりと、ルールの形成に必要なスキルを少しずつ獲得していきます。
- (3) ビジョントレーニング（視覚機能を高めるために、見る＝目、判断する＝脳、行動する＝身体の訓練をすることで脳を強化していくためのトレーニング）は、オリジナルプリントを使用しながら、講師の指示で目を動かすことで、眼球運動の中核である前頭葉に刺激を与えることを目標にしています。いくつかの発達障害の原因とされる前頭葉に刺激を与えることは、視覚機能を伸ばすだけでなく、その後に行われる算数と国語の学習効果を高められるように心がけています。

5 運動支援の具体的内容

医療現場（作業療法）では、発達障害児の療育実践として、感覚統合療法が用いられています。この療法は、スイングやスクーターボードなどを使用し、子どもに感覚刺激を与えることで、適応反応を引き出して、認知・学習・社会的適応性の獲得をめざしていく治療になります。

本塾の運動支援では、感覚統合療法を参考に、こちらが意図した高い負荷の運動を、子どもたちが楽しく積極的に飽きずに実践させることで、運動刺激を与えることを目標にしています。特に、バランストレーナーやプライオメトリックスボックス、スラックラインなどを使用することで、限られたスペース（主に日本間 50 畳）の中で毎時間高負荷なトレーニングを、トレーニングをし

ている感覚ではなく遊び感覚で行わせる工夫をしています。

John J. Ratey (2009) によれば、運動は脳を活性化させ、学習に必要なニューロンを脳に与える効果があります。そのため、本塾の運動支援は、体力だけでなく学校の授業にかかせない認知・学習・社会的適応性の獲得もめざしています。

6 公的機関との連携

設立当初は、桑名市の市民活動センターや社会福祉協議会などに団体登録し、関係諸団体に認知されるために勉強会や研修会への参加、公的機関への広報活動を行ってきました。また、桑名市の教育委員会から理解を得ることで、各公立の幼稚園、小学校に在籍する児童生徒約 8000 人に、本塾の存在と学校や日常生活で苦戦している子どもたちの存在の啓発活動のため、約 8000 枚のチラシを配布しました。

このような活動の結果、最近の入塾の傾向は、桑名市の公的機関からの紹介が主になりました。また、入塾した後も子どもたちの発達検査（WISC、新版 K 式発達検査、田中ビネー知能検査など）の結果を公的機関から保護者を通して提供していただくことで、間接的ではありますが、公的機関との関係性も形成されつつあります。さらに、子どもたちや学習支援ボランティア向けの講座や講義の講師派遣依頼を公的機関から受けることで、発達支援の地域環境整備にも努めています。

7 成果

教育支援事業の活動成果は、参加しているお子さんの、「もう終わり？ もっとやりたい！」「楽しい、次は何？」という声からも、毎回充実した授業内容だと実感しています。また、保護者からは、「子どもたちの表情が豊かになった」「ほかの子どもと共同作業ができていて、驚いた」と子どもたちの著しい成長を実感していただき、保護者の不安も軽くなっていることがわかります。

講師や支援員の視点からは、在籍している子どもたちの判断力、認知力、コミュニケーション力が少しずつ上がってきていることを実感しています。データ上でも、運動支援の本塾オリジナル体力テストの経月変化から、跳躍力やバランス感覚、筋力が飛躍的に向上していることが見てとれました。

環境面での事業成果は、子どもの発達の遅れに気づいた時に、本塾が支援の受け皿になるということ、保護者、一部の学校教員や公的機関に認知していただけたことです。

支援活動を通して地域社会や関係諸団体へ本塾の“のうはう”を還元することで、支援の質の向上に繋がるように今後も努めていきます。